View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

Make them Focus on Form: Incorporating e-mail-mediated Language Learning Activities into Communication-based EFL Classrooms in a Japanese Junior High School Context [全文の要約]

著者	Sasaki Akihiko
year	2012-09-20
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第460号
URL	http://doi.org/10.32286/00000060

Make them Focus on Form:
Incorporating e-mail-mediated Language Learning Activities into Communication-based EFL Classrooms in a Japanese Junior High School Context

---

A Dissertation Submitted to

The Graduate School of Foreign Language Education and Research,

Kansai University

In Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree

Doctor of Philosophy in Foreign Language Education and Research

---

by

SASAKI, Akihiko

March 31, 2012

© Copyright by SASAKI, Akihiko, 2012

論文要旨（概要）

1980 年代以降、文部省（現在の文部科学省）は日本人中学高校生の英語による実践的コミュニケーション能力の養成を目標に掲げ、英語授業でのコミュニケーション活動 (Communicative Language Teaching; CLT) の採用を促してきた。しかしながら、CLT は日本の英語教育現場に十分に定着せず、その結果、今でも文法訳読法 (Grammar-Translation Method; GTM) や Audio-Lingual Method (ALM) などの伝統的な教授法が、多くの英語授業で中心的に用いられている (Fotos, 2002; Hato, 2005; Lamie, 2001; Melodie, 2009; Sakui, 2004; Sato, 2002; Wada, 2002) 。このような現状を踏まえ、本博士論文では、CLT に代わり得るコミュニケーション活動を提案し、その方法が日本人中学生、とりわけ筆者の教育対象である中学生上級英語学習者のコミュニケーション活動として有効かどうかを検証し、さらに、その活動がより有効に機能するための方策について、第二言語習得理論的枠組みの中で考察・提案することを目的とした。

本論文は 4 つの実証研究を含む、全 7 章から構成されている。第 1 章では、今回の研究を始めるに至った経緯と各章の概要について詳述する。なお、本論文は、筆者がその勤務校で担当する、上級英語選択講座の CALL (Computer-Assisted Language Learning) という特定の文脈に導入する代替コミュニケーション活動を提案・検証するという目的を持つ。そのため、4 つの実証研究すべては、講座を履修する限られた学習者層を対象とした探求的研究であること、また同時に、それぞれの研究結果を日本人中学生に広く一般化する意図を持たないことが明記されている。

第 2 章の前半では、CLT の歴史的・理論的背景と、それを日本の英語教育に導入した際の問題点について先行研究のレビューを行う。後半では、CLT に代わるコミュニケーション活動として Computer-Mediated Communication (CMC) を介した Focus on Form (FonF) を提案する。FonF は、意味理解を中心とする communication

活動の中で、自らが気づく学習言語 (L2) の言語形式 (form) を学習者は学ぶと主張するアプローチである。したがって、FonF では、学習者が form に気づくことが重要となるが、コミュニケーションが書き言葉で行われる CMC、その中でも特に、受信と返信の間にメッセージを何度も読み返すことができる非同期型 CMC (たとえば e-mail の利用) は、学習者の気づきをより効率的に促進する教育活動と考えられる。

第 3 章では、英語母語話者 (NS) との e-mail communication 活動に従事した日本人中学生の気づきを FonF の見地から検証した研究を報告する (Study 1) 。検証の結果、生徒は確かに L2 form に気づくが、それらの大半はメッセージ理解の障害となった未知の語彙に向けられていること、また、それらの語彙は、必ずしも生徒の記憶に定着していないことが明らかになった。しかしながら、参加者の中に、他生徒よりも文法への気づきが多く、語彙の定着度も高い生徒が 2 人おり、彼らは NS の e-mail text から学んだ英語知識を、後日に受験予定の英語検定試験や私立高校入学試験で活用する意図を持って e-mail 活動に参加していたことも確認された。この事例から、e-mail-mediated FonF では、NS の L2 input で気づいた L2 form を事後利用する意識を持たせる教師の介入が、学習者の気づきと語彙の定着を促進する一つの要因である可能性が示唆された。

第 4 章では、前章の議論を踏まえ、NS の e-mail text で気づいた L2 form の事後利用を促す教師の介入が、学習者の文法への気づきと語彙学習に与える影響について調査した (Study 2) 。ここでは、Study 1 と同様の e-mail communication 活動において、「NS の e-mail text で学んだ文法と語彙の事後テスト実施を予告する」という介入を与え e-mail 活動を行ったところ、Study 1 に比べ、生徒の文法への気づきが増え、気づいた語彙の定着率も高まった。これらの結果から、気づいた form を事後に利用する目的意識を持たせる介入 (treatment) が有効であることがわかった。なお、この第 4 章では、学習者の文法への気づきと語彙学習に関して、Study 2 のデー

タ分析を通して得られた新たな知見とその考察が記述されている。それによると、まず、学習者の文法への気づきのほとんどは既習項目に向けられていたことから、通常の中学校英語授業で教えられる明示的文法知識は、極めて重要であることがわかった。また、学習者の verbal protocol (インタビューの書き起こし) を分析した結果から、文法項目により多く気づいた生徒は metalinguistic awareness (MA) が高いことが明らかになり、ここから、MA も e-mail-mediated FonF における学習者の気づきを促す要因の一つであることが示唆された。この議論をもとに、続く第 5 章では、MA を高める学習活動の検証が行われる。さらに、Study 2 で用いられた語彙テストの分析を通して、学習者は e-mail 活動で気づいた語彙を、他の学習文脈で習得している可能性が浮かびあがった。そこで、この問題を第 6 章で検証することとした。

第 5 章では、Study 2 の議論にもとづき、MA を高めると言われる E-mail tandem language learning を実践し、その効果を検証した研究を報告する (Study 3) 。E-mail tandem language learning は、異なった母語 (L1) を持つ 2 人の学習者が、それぞれの L2 (パートナーの L1) を使って e-mail communication を行い、お互いの言語使用に対してフィードバックを与え、双方の L2 学習を支援する学習活動である。Appel (1999) は、E-mail tandem のフィードバック活動、その中でも、パートナーの使用した言語に関する分析、および学習者自身の L1 文法規則を明示化する認知活動が学習者の MA を高めると主張しているが、データ分析の結果、学習者は確かに、フィードバック活動を通して MA を高めていることがわかった。また、学習者の MA の高さと L2 proficiency の間に、正の相関も確認された。

第 6 章では、e-mail 活動を通した語彙習得が生起する文脈と過程について、社会文化理論の見地から精査・考察した結果が記述されている (Study 4) 。社会文化理論によれば、人間の知識は人と人との社会的相互作用、または人と人工物との文化的相互作用を経て構築されるが、その過程において必要なのが imitation (模倣) であるという。そして、外国語学習の場合、上級者 (expert) が提供した言語形式を初心

者 (novice) が模倣することで学びが起こるとされている。この Study 4 では、e-mail 活動を通した日本人学習者の語彙学習を、社会文化理論、とりわけ imitation の観点から検証した Fotos (2004) の研究に着目し、e-mail mediated FonF に従事した生徒が imitation によって語彙を習得するのか、また、e-mail 活動における imitation 以外に語彙習得をもたらす過程 (process) や文脈 (context) は存在していないのか、について精査した。データ分析の結果、学習者は、e-mail communication 活動で気づいた語を、活動中の imitation だけでなく、通常の英語授業や補習などの文脈で再度出会った際に、その意味や形を思い出す認知活動を繰り返すことで、定着させていることがわかった。

本論文の最終章である第 7 章では、4 つの実証研究が持つ限界点の提示に続き、本論文で報告された研究結果の要約が記述されている。それによると、NS との e-mail communication 活動は、筆者が対象とした教育現場においては、通常の英語授業との連携や、気づいた L2 form の事後使用を促す教師による的確な介入、さらには、MA 向上を促進する E-mail tandem language learning といった補完的活動を施すことにより、FonF 活動として有効に機能し得る、という結果であった。最後に、今後の研究の方向性として、e-mail-mediated FonF を実践する際、学習者の気づきを促すために与える介入の種類を拡張し検証すること、および、本論文では扱わなかった Noticing the Gap (Schmidt & Frota, 1986) の観点で学習者の気づきとその学びを検証することなどが示唆されている。